（別紙 2）

審査の結果の要旨

氏名　吉田　聡

本論文は、「自我」をめぐるフッサールの現象学的分析を丹念に検討することによって、対象や自己自身に対する主観としての自我の在り方を明らかにし、現象学的自我論の再構築を試みようとしたものである。フッサールの自我論に関する先行研究は少なくないが、対象との相関関係において自我の在り方を解明した点、自己自身を現象学的に反省する自我をも視野に入れて、フッサール自身が展開せずに終わった「現象学の現象学」をも試みた点に、本論文の独自性がある。

本論文の前半では、対象に対する主観としての自我の在り方の解明が試みられる。第 1 章ではまず、フッサールにおける自我概念の展開が追跡され、後期には「習性」「歴史」を具えつつ生成する「モナド」という自我概念に至ったことが明らかにされるが、第 2 章ではこの展開が、「対象」概念の変遷と相関して要請されたものであることが解明される。意味の生成という発生的視点が「対象」概念に導入されたことで、「習性」としての過去を担う主観という後期の自我概念が要請されたのである。第 3 章ではさらに、自我にとっての対象の成立が、今後「何度でも再想起できる」という「未来」に関わる能力によって支えられていることが際立たせられる。対象に対する主観としての自我はそれゆえ、「未来」を先取りしつつ「過去」に支えられ「現在」の対象に対峙する在り方をしているのである。

本論文の後半では、このような自我を現象学的に反省する「私」の在り方が解明される。まず第 4 章では、フッサールの分析を手がかりに、反省が「自我分裂」であり、反省する自我は恒常的に「自己忘却」していることが明らかにされる。「原象」「原自我」などと呼ばれる反省する自我は、決して反省の対象にはならず、それでいて〈つねに新たな反省を促してくる何か〉である。第 5 章では、フッサールの他者論においても、他者と共に現在する間主観的な自らのあり方を反省する自我に関して、同様の解釈が成り立つことが示される。さらに第 6 章では、後期時間論を手がかりに、反省する自我の在り方が、つねに新たな反省を呼びかけてくる「先存在」として、さらに〈生き生きした現在において機能する自我がつねに自己自身を触発し新たな反省を促してくる〉純粋自己触発の事態として明らかにされる。ここに主観としての自我をめぐる現象学的自我論が行きつく〈現象学の現象学〉の一つの姿が見届けられるのである。

以上のように、本論文は、フッサールのテクストを縦横かつ丹念に読み解きつつ、フッサールが展開し得なかった〈現象学の現象学〉をも試みようとした意欲的な論考である。確かに本論文には、他者の捉え方や自己触発と後期時間論との関係に関して、議論が十分でない点も認められる。しかし本論文が、先行研究には見られない仕方で、「未来」に関わる自我の在り方や「先存在」の概念の内実を明らかにした意義はきわめて大きい。

よって本論文は博士（文学）の学位を授与するに十分値すると判断する。